

图16 小形桥穴式石室断面图

位、横位共に通ってはいない。

右側壁は基本的に3段に積まれている。まず第1段（基底石）は、前述の様に若干丸みを帯び、大きさもそろった石材を使用しているが、開口部のそれについては他より大きな石材を使用している。第2段は石材の大きさにバラつきがあり、奥に進むに従って石材が大きくなることを観察できる。第2段の石材は奥壁と同様に石を小口積みしている。3段目は2段目の石材に比して全体的に小さいものである。2段目同様小口積みであり、2段目が若干持ち送られているのに続いて、3段目はさらに急な持ち送りが為されている。なお右側壁は第2段及び、第3段の一部の石材が抜き取られている。目地は横位のものは一応通るが縦位は通らない。

左側壁は4段に積まれている。1段目（基底石）は、奥壁や右側壁と同様に、丸みを帯びた同程度の大きさの石材が使用され、前述のように若干開張りを持って積まれている。2段目は、比較的大きな石材を小口積みしている。第3段、第4段は第2段よりやや小さい石材を用い、小口積みにするのは変化しないが、第4段では第3段までには見られなかった持ち送りが、右側壁ほどではないにしろ観察できる。横位、縦位共に目地は通らない。

天井は全体が完存している。すべての天井石は、平坦な加工面を内側に見せて積まれている。南端の天井石は、開口部に向かって緩い傾斜を持たせて積んである。

閉塞部分は右半部が遺存しており、現状では自然石が4石存在していた。閉塞に際しては開口部に土を盛った後に、自然石を置いたものと推定される。

なお、石室構築の順序は、各段共に奥壁を構築した後に奥壁から開口部に向かって、石材を積んでいる。

調 整 (図16)

まず天井石外面の石材調整は、北端の天井石の北側及び東側側面、あるいは南端の天井石の北側側面に認められるように、部分的に荒割り調整を施している。しかし、それは全体にわたるものではなく、大半が自然石のままの、もしくは、自然に割れたものが風化したような状態のままの石材を使用している。一方、天井石内面は、ほとんど全面に小叩き調整^(註)を施しており、全体的に平坦な感を与えているが、成形時の荒割りで作られたとみられる段を明確に残している部分も若干認められる。

次に石室外面の石材の調整は、大体において自然石のままの部分が多く残しているが、石材を組み合わせる面は、荒割りによって平坦な面をつくり出し、石材間の安定を図っている。また石室内壁部のうち第1石（基底石）は、ほぼ全面にわたって小叩きによる調整を施している。第1石（基底石）は、大きさも形も類似しているが、そのために意図的に成形を施したような跡もみられる。この第1石（基底石）は全て石室内面から見える位置にある部分は小叩きによって、丁寧な調整を行なっている。石室内から見えない部分については、成形時の荒割りの状態か、もしくは自然石の状態のままに残されている。

第1石(基底石)以上の石は、大きさも形も揃いで雑然としており、表面調整についても、基底石ほどは徹底して調整しておらず成形時の段や凹凸を残す部分が多い。

なお石室内に置かれている、棺台と思われる2石については、表面に表われる面は、自然の状態を多分に残している。それに対して、床面下に埋没する裏面は、成形時の荒割りのままの状態で使用されている。

(註)ここで言う小叩きとは、表面に細かな不整形の凹凸を顕著に残す、葛城石英閃緑岩等の硬質の石材に対する調整法を指し、石棺等に見られる様な、チョウナ等の工具によるかと推定される、調整痕を指すものではない。和田晴吾氏(1983)の敲打具技法に相当するものかも知れない。

和田晴吾「古墳時代の石工とその技術」(『北陸の考古学』『石川考古学研究会会誌』第26号、1983年)

4 遺物(図17~24)

墳丘北・墳丘東トレンチから弥生土器が破片数にして約500点出土している。一部中期的な特徴を留める個体もあるが、いずれも畿内第V様式に属するものであろう。

畿内第V様式の諸形式の土器の中で、現状ではその型式組列がもっともよく完成されているとされる⁽¹⁾高杯形土器を中心とみると、まず杯部については、口縁部が明瞭な段を持ちながら体部から立ち上がるもので、いずれも口縁高は体部高に及ばない。

脚部は、中空円筒状の長い脚部をもつもの(32)もあるが、多くは中空円錐状の脚部をもつものであり、杯部と脚部相互の成形手法には、円板充填法(32)と接合法(33)の二者が認められる。

これらの諸特徴は寺沢薫氏による形・型式分類の高杯B₁に該当し、第V様式中の⁽¹⁾様式2に属するものである。

墳丘盛土内および周溝埋土内から出土した土器であるため、その一括性は乏しく若干の危険を伴うが、他の器種を瞥見しても、高杯形土器の示す様式2との矛盾をきたすものとも思えず、本墳出土の弥生土器は、畿内第V様式前半の中でもより早い段階に属するものと見て大過ないであろう。

さて、古墳そのものに伴う遺物は数少なく、鉄刀子(49)と須恵器杯身(50)を挙げ得るに過ぎない。しかも両者共に墳頂部平坦面の攪乱土中より出土したものであったため、本来もう1つあったと考えている主体部と先述の小形横穴式石室とどちらに伴うものか明確にし難い。とはいえ、須恵器杯身は石室用材かと思われる石と共に横穴式石室から至近の距離で出土しているのであって、これは、石材の抜き取りがあった際に、おそらくは右側壁材と共に持ち出されたものかと思われ、⁽²⁾従って小形横穴式石室に帰属するものである可能性が高い。TK209型式に相当する。

墳丘盛土内からは円筒埴輪片が出土している。川西編年⁽³⁾IV期もしくはV期⁽³⁾に相当するもので、底部調整は行っていない。また墳頂部の表土層からは、中・近世の遺物も出土した。

註1) 寺沢薫「六条山遺跡」(『奈良県文化財調査報告書』第34集、1980年)

註2) 田辺昭三「陶器古窯址群 I」(『平安学園研究論集』第10号、1966年)

註3) 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年)

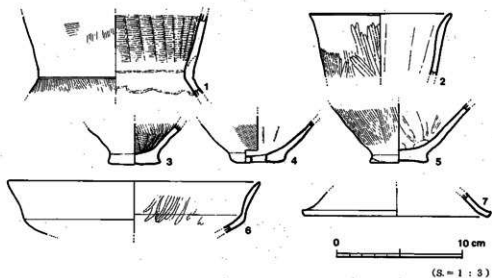


図17 墳丘北トレンチ出土遺物

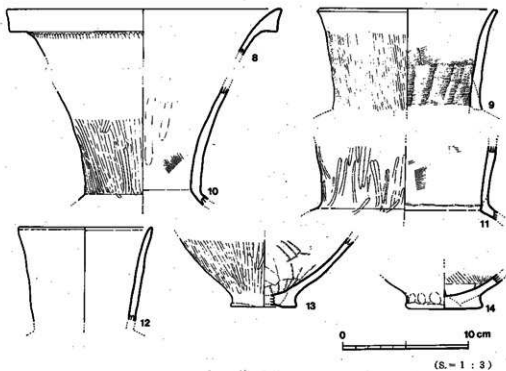


図18 墳丘東トレンチ出土遺物(その1)

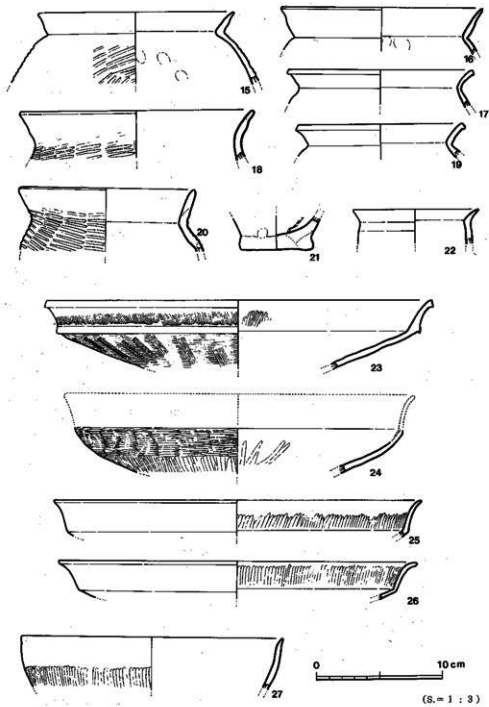


图19 墳丘東トレンチ出土遺物 (その2)

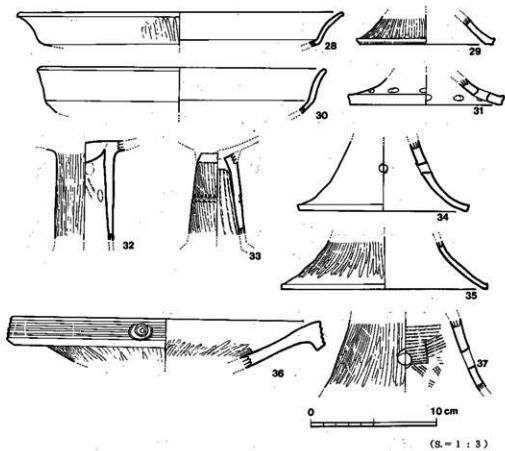


図20 墳丘東トレンチ出土遺物(その3)

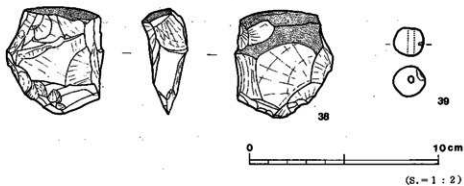
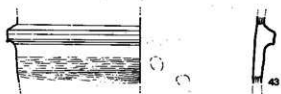
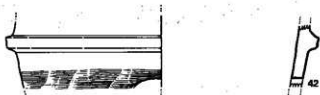
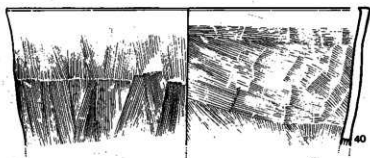


図21 墳頂トレンチ出土遺物(その1)



(S. = 1 : 3)

図22 墳頂トレンチ出土遺物(その2)

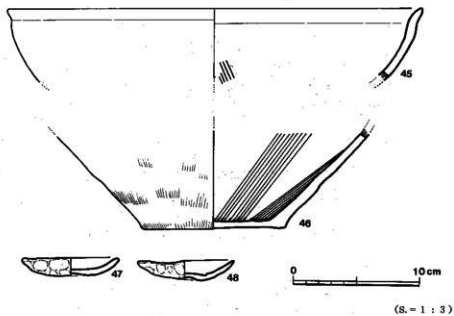


図23 墳頂部出土遺物（その1）

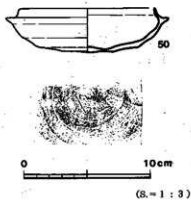
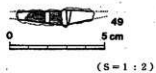


図24 墳頂部出土遺物（その2）

遺物観察表

遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部)	胎土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備考
1. 大型甕(頸部) 墳丘北トレンチ 墳丘盛土内	頸部径 12.4 cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 頸部に印線。6条/cmのハケメを左廻りに施す。後、ヨコナデ。 内面 6条/cmのハケメを左廻りに施す。 ・外面 6条/cmのハケメを左廻りに施す。 内面 未調整。 ・	直径1mm以下の石英、長石、チャートを含み。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
2 長頸甕(口縁部) 墳丘北トレンチ 墳丘盛土内	口径 11.2 cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 3条/cmのヘラミガキを右廻りに施す。後、口唇部付近のみヨコナデ。 内面 ハケ工具によるナデ。 ・	直径1mm以下の石英、長石、チャート、角閃石、雲母を含む。	良好	・黄褐色 ・赤黄褐色 ・黄褐色	
3 甕(底部) 墳丘北トレンチ 墳丘盛土内	底径 4.2 cm (残存1/4からの回転復元) ・ ・ ・平底 外面 底部未調整。体部へと移行するに従いヨコナデ。 内面 クモノス状ハケを左廻りに施し5条/cmの右廻りのハケを消す。	直径1mm以下の石英、長石、チャート、角閃石を含み。	良好	・茶褐色 ・茶褐色 ・暗灰褐色	
4 甕(底部) 墳丘北トレンチ 墳丘盛土内	底径 4.3 cm (残存1/4からの回転復元) ・ ・ ・外面 底部未調整。焼成前穿孔。体部に移行するに従いヨコナデ。 内面 クモノス状ハケ。後上部のみナデ。	直径1mm以下の石英、長石、チャート、雲母を含む。	良好	・茶褐色 ・赤褐色 ・黄褐色	
5 甕(底部) 墳丘北トレンチ 墳丘盛土内	底部径 4.5 cm (残存1/4) ・ ・外面 7条/cmのハケメを左廻りに施す。指痕による不定方向のナデ。 内面 やや突出する底部。底部にタタキメ後へう掻きによる三本の平行する縞あり。体部に移行するに従いヨコナデ。 内面 指痕による不定方向のナデ。	直径1mm以下の石英、長石、チャート、角閃石を含み。	良好	・茶褐色 ・茶褐色 ・茶褐色	
6 高杯(杯部) 墳丘北トレンチ 墳丘盛土内	杯部径 19.8 cm (残存1/4からの回転復元) 明確な段を持ち口唇部が外反しながら立ち上がる。 ・外面 ヨコナデ。 内面 4条/cmのヘラミガキを右廻りに施す。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・	直径0.5mm以下の石英、長石、チャート、角閃石を含む。	良好	・黄褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
7 高杯(脚部) 墳丘北トレンチ 墳丘盛土内	脚部径 14.4 cm (残存1/4からの回転復元) ・ ・ ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。	直径0.5mm以下の石英、長石、チャート、角閃石、雲母を含み。	良好	・黄灰色 ・茶褐色 ・赤褐色	

遺物番号 器種 出土場所	口頸部 形態と調整 ・体部 ・底部(脚部)	胎土	焼成	外面 ・内面 ・断面 色調	備考
8 壺(口縁部) 埴丘東トレンチ 周溝埋土内	口径 21.8 cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 口頸部ヨコナデ。頸部以下3条/cmのヘラミガキを右廻りに施した後ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	直径 0.5 cmの石英、長石、チャート、雲母を含む。	良好	・赤褐色の顔料塗布 ・上半 赤褐色の顔料塗布 下半 茶褐色 ・暗灰黄色	
9 短頸壺(口縁部) 埴丘東トレンチ 周溝埋土内	口径 13.8 cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 7条/cmのハケメを右廻りに施した後口唇部のみヨコナデ。 内面 7条/cmのハケメを右廻りに施す。 ・ ・	直径 0.5 mmの石英、チャートをわずかに含む。直径 0.5 mmの雲母をかなり含む。	良好	・暗赤褐色 ・赤黄色 ・赤黄色	
10 広口長頸壺(頸部) 埴丘東トレンチ 周溝埋土内	頸部径 9.2 cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 3条/cmのヘラミガキを右廻りに施した後口唇部付近のみヨコナデ。 内面 13条/cmのハケメもしくは指環によるナデ。 ・ ・	直径 0.5 mm程度の石英、長石、チャート、雲母を若干含む。	良好	・明赤褐色 ・明赤褐色 ・明赤褐色	
11 広口壺(頸部) 埴丘東トレンチ 周溝埋土内	頸部径 14.0 cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデの後粗いヘラミガキ。 内面 10条/cmのハケの後ヨコナデ。 ・ ・	直径 0.5 mmの石英、長石、チャート、赤色粒、雲母を含む。	良好	・赤黄褐色 ・赤褐色 ・灰褐色	
12 長頸壺(口縁部) 埴丘東トレンチ 周溝埋土内	口径 10.5 cm (残存1/4からの復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	直径 0.5 mmの長石、チャートを含む。微細な雲母多い。	良好	・黄褐色 ・赤黄褐色 ・赤黄褐色	
13 壺(底部) 埴丘東トレンチ 周溝埋土内	底部径 5.2 cm (残存1/4から回転復元) ・ ・外面 4条/cmヘラミガキを左廻りに施す。 内面 荒ガキ手法。 ・やや突出する底部 外面 体部に移行するに従いヨコナデ。 内面 クモノス状ハケを左廻りに施す。	直径 1 mm以下の石英、長石、チャート、雲母を含む。	良好	・暗赤褐色 ・明褐色 ・黒灰色	
14 壺(底部) 埴丘東トレンチ 周溝埋土内	底部径 5.6 cm (残存1/4から回転復元) ・ ・外面 ヨコナデ。 内面 荒ガキ手法 ・底部未調整 外面 指環による押圧。 内面 クモノス状ハケ。	直径 0.5 mm以下の石英、長石、赤色粒をわずかに含む。	良好	・体部 黄褐色 底部 灰褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	
15 壺型土器 埴丘東トレンチ 周溝埋土内	口径 15.4 cm (残存約1/4からの回転復元) ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 2.5条/cmのタタキメを上から下へ右廻りに施す。頸部付近はヨコナデでタタキメを消す。 内面 頸部付近ヨコナデ。斜上りからヨコナデ。 ・	直径 0.5 mmの石英、長石、チャートを含む。直径 0.5 mmの雲母を大量に含む。	良好	・黄赤褐色 ・黄赤褐色 ・一部黒色	

遺物番号 器種 出土場所	口頸部 形態と調整 ・体部 ・底部(脚部)	胎土	焼成	外面 色調 ・内面 ・断面	備考
16 中型甕 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	口径16cm(残存1/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。 内面 指痕による押さえ。 ・	直径1mmの石英、 直径0.5mmの石英、 チャートを含む。 微細な雲母を大量 に含む。	良好	・黄赤褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	
17 中型甕 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	口径14.6cm(残存1/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 不明。煤付着。 内面 指痕による押さえ。 ・	直径1mm以下の石 英、長石、角閃石、 チャート、雲母を かなり含む。	ややあまい	・茶褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
18 大型甕 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	口径18.4cm(残存1/4からの回転復元) ・外面 口縁タキ出し技法。後、ヨコナデ で消す。 内面 ヨコナデ。 ・外面 煤付着。3条/cmのタキメを左廻 りに施す。 内面 ヨコナデ。 ・	直径1mm以下の石 英、長石、チャ ート、雲母を大量に 含む。	ややあまい	・灰褐色 ・黄褐色 ・暗灰褐色	
19 甕 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	口径13.1cm(残存1/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・	直径0.5mmの石英、 長石、赤色粒、雲 母を含む。	良好	・黄褐色 ・黄褐色 ・灰黒色	
20 中型甕 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	口径14.0cm(残存1/4からの回転復元) ・外面 口縁タキ出し技法。後、ヨコナデ。 剥離著しい。 内面 ヨコナデ。 ・外面 3条/cmのタキメを右廻りに施す。 内面 ヨコナデ。 ・	直径1mm以上の石 英、長石、チャ ートを大量に含む。 微細な雲母をかなり 含む。	ややあまい	・灰黄色 ・黄灰褐色 ・黄灰褐色	
21 甕底葺 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	底部径6cm(残存1/4からの回転復元) ・ ・ ・底葺未調整 外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。	直径1mm以下の石 英、長石を含む。 雲母をかなり含む。	良好	・暗赤褐色 ・赤褐色 ・暗黄褐色	
22 不明 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	口径10.0cm(残存1/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・不明 ・	直径1mm以下の石 英、長石、チャ ート、角閃石、雲母 を大量に含む。	良好	・灰褐色 ・明褐色 ・黄褐色	
23 高杯(杯部) 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	口径30.8cm(残存1/4からの回転復元) ゆるやかな体部から、明瞭な股を持ち口頸部が 外反しながら、立ちあがる。 ・外面 10条/cmのヘラミガキを右廻りに施 す。口頸部のみヨコナデ。 内面 10条/cmのヘラミガキを左廻りに施 す。ほとんど剥離。 ・外面 10条/cmのヨコハケの後、10条/cm の放射状のタテハケを施す。 内面 ヨコナデ。 ・	直径1mm以下の石 英、長石、チャ ート、赤色粒をかなり 含む。角閃石を わずかに含む。微 細な雲母多い。	良好	・黄褐色 ・淡褐色 ・黄灰色	

遺物番号 器種 出土場所	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部 体部 底部(脚部) 形態と調整	胎土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備考
24 高杯(体部) 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	釦口径25.8cm(残存1/4からの回転復元) ・外面 4条/cmのヘラミガキを右廻りに施した後、上部のみ4条/cmのヘラミガキを横方向に施す。 内面 4条/cmのヘラミガキを左廻りに施す。 ・—————	直径1cm以下の石英、チャートを含む。	良好	・赤褐色 (赤色に染色する胎土) ・赤褐色(赤色に染色する胎土) ・黄灰色	
25 高杯 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	口径29.4cm(残存1/4からの回転復元) ゆるやかに立ちあがる体部から明確な段を持ち、口唇部は大きく外反しながら立ちあがる。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデの後、3条/cmのヘラミガキを左廻りに施す。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・—————	直径0.5mmの石英、長石、チャートを含む。雲母も含むが粒子が小さく、比較的少ない。	ややあまい	・濃褐色 ・褐色 ・褐色	胎土等、他の土器とかなりちがう。
26 高杯 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	口径28.6cm(残存1/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。口唇部、強いヨコナデにより丸くしあげる。 内面 ヨコナデの後、5条/cmのヘラミガキを右廻りに施す。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ゆるやかに立ちあがる体部から、明確な段を持ち、口唇部は大きく外反しながら立ちあがる。 ・—————	精段。 直径0.5mmの石英、長石、チャートを含む。雲母を多く含む。	良好	・淡茶褐色 ・淡茶褐色 ・淡茶褐色	
27 高杯 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	口径20.8cm(残存1/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデの後、4条/cmのヘラミガキを左廻りに施す。 内面 ヨコナデ。 ・—————	直径0.5mmの石英、長石、チャート、雲母を含む。	良好	・暗黄褐色 ・黄褐色 ・暗黄褐色	
28 高杯(杯部) 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	口径25.8cm(残存1/4からの回転復元) 明確な段を持ち口唇部が外反しながら、立ち上がる。 ・外面 ヨコナデの後、2条/cmのヘラミガキを左廻りに施す。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・—————	直径0.5mm以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。雲母多し。精段。	良好	・黄褐色 ・明褐色 ・黄褐色	
29 高杯(脚部) 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	脚部径9.4cm(残存1/4からの回転復元) ・————— ・外面 4条/cmのヘラミガキを左廻りに施す。脚部には、にぶい凹線。 内面 ヨコナデ。	直径0.5mmの石英、長石、チャート、角閃石雲母を含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
30 高杯(杯部) 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	口径22.8cm(残存1/4からの回転復元) 明確な段を持ち口唇部が外反しながら、立ち上がる。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・—————	直径1cm以下の石英、長石を含む。雲母を含む。精段。	良好	・赤褐色 ・淡赤黄色 ・赤黄色	

遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部)	胎土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備考
31 高杯(脚部) 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	脚部径12.0cm(残存1/4からの回転復元) ・———— ・———— ・外からの穿孔。12方通し。 外面 ヌコナデ。 内面 ヌコナデ。	直径0.5mm以下の チャート、赤色粒、 雲母を若干含む。 精良。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
32 高杯(脚柱部) 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	脚柱部径2.3cm(残存1/4) ・———— ・———— ・往状脚。杯部との接合は、円板充填。 外面 5条/cmのヘラミガキ。 内面 上半は指頭による不定方向ナデ。 下半はヌコナデ。	直径0.5mmの石英、 長石、チャートを わずかに含む。雲 母多い。精良な胎 土。	良好	・黄白褐色 ・黄白褐色 ・黄褐色	
33 高杯(脚部) 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	円盤部径3.9cm(残存1/4からの回転復元) ・———— ・———— ・外面 4条/cmのヘラミガキの後凹線、及 びヘラ先による割突。 内面 シボリメ。	直径0.5mmの長石、 石英、チャート、 雲母。	良好	・明褐色 ・茶褐色 ・黒灰色	
34 高杯(脚部) 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	脚径13.4cm(残存1/4からの回転復元) ・———— ・———— ・外面からの植成前穿孔。4方通し。 外面 ヘラミガキ？ 内面 不定方向のナデ後脚端部のみヌコナ デ。	直径2mmのチャ ートを含むが、概し て精良な胎土。 雲母かなり含む。	良好	・灰褐色 ・灰褐色 ・灰褐色	
35 器台脚部 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	脚部径16.4cm(残存1/4からの回転復元) ・———— ・———— ・外面 ヌコナデ後、4条/cmのヘラミガキ を左廻りに施す。 内面 ヌコナデ。	直径0.5mmの石英、 長石、チャート、 雲母を含む。	良好	・淡赤褐色 ・赤褐色 ・茶褐色	
36 高杯 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	口径29.4cm(残存1/4からの回転復元) ・明瞭な段を持ち口唇部が外反しながら、立 ち上がる。 外面 ヌコナデ。 内面 ヌコナデ後ヘラミガキ3条/cm左廻 りに施す。 ・———— ・————	直径0.5mmの石英、 長石、チャートを 含む。雲母を含む が粒子が小さく、 比較的少ない。	ややあまい	・濃褐色 ・褐色 ・褐色	
37 器台体部 墳丘東トレンチ 周溝埋土内	(残存1/4からの回転復元) ・———— ・透し数不明 外面 3条/cmのヘラミガキを左廻りに施 す。 内面 3条/cmのヘラミガキを右廻りに施 す。 ・————	直径0.5mm以下の 石英、長石、チャ ート、雲母を含む。	良好	・明茶褐色 ・灰褐色 ・灰褐色	

遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部(脚部)	胎土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備考
38 サマカイト石核 墳頂トレンチ 墳丘盛土内					石核製作用の 石核か。
39 土玉 墳頂トレンチ 墳丘盛土内	手づくねによる成形。	直径0.5mm以下の 石英をわずかに含 む。	良好	肌色	
40 円筒埴輪(口縁部) 墳頂トレンチ 墳丘盛土内	口径27.2cm(残存片からの回転復元) ・外面 10条/cmのハケメを左廻りに施した 後口唇部のみヨコナデ。 内面 10条/cmのハケメを左廻りに施した 後口唇部のみヨコナデ。 ・外面 10条/cmのハケメを左廻りに施す。 内面 10条/cmのハケメを左廻りに施す。 ・―― ・――	直径1mm以下の石 英、長石、チャ ート、角閃石を含む。 直径0.5mm以下の 雲母をかなり含む。	良好	・黄褐色 ・赤黄褐色 ・灰黄色	穿窯焼成
41 円筒埴輪(口縁部) 墳頂トレンチ 墳丘盛土内	口径20.8cm(残存片からの回転復元) ・外面 5条/cmのB種ヨコハケを右廻りに 施した後口唇部のみヨコナデ。 内面 6条/cmのヨコハケもしくは指頭による 押圧。 ・―― ・――	直径0.5mm以下の 石英、長石、チャ ートを含む。雲母 比較的数量ない。	ややあまい	・赤褐色 ・黄赤褐色 ・灰黄色	穿窯焼成
42 円筒埴輪(体部) 墳頂トレンチ 墳丘盛土内	突帯径26.0cm(残存片からの回転復元) ・―― ・外面 10条/cmのヨコハケを施した後突帯 をはり付けヨコナデ。 内面 指頭による斜め方向のナゲ及びヨ コナデ。 ・――	直径1cm以下の石 英、長石、赤色粒 チャート、雲母を 含む。	ややあまい	・赤黄褐色 ・淡褐色 ・黄褐色	穿窯焼成
43 円筒埴輪(体部) 墳頂トレンチ 墳丘盛土内	突帯径21.2cm(残存片からの回転復元) ・―― ・外面 6条/cmのヨコハケを施した後突帯 をはり付けヨコナデ。 内面 ヨコナデ及び指頭による押圧。 ・――	直径0.5mm以下の 石英、長石、チャ ートを含む。雲母 比較的数量ない。	ややあまい	・赤褐色 ・黄褐色 (顔料塗 布) ・黄赤褐色 ・灰黄色	穿窯焼成
44 円筒埴輪(底部) 墳頂トレンチ 墳丘盛土内	底部径26.0cm(残存片からの回転復元) ・―― ・―― ・外面 5条/cmのクテハケの後5条/cmの ヨコハケを左廻りに施す。 内面 底部調整を行わず粘土のはみ出し が著しい。調整は指頭による左斜め 上がりナゲ。	直径1mm以下の長 石、石英、チャ ート、雲母をかなり 含む。	ややあまい	・黄白赤色 ・黄白赤色 ・黄白赤色 のサンド イッチ、 中心が黄 白色	穿窯焼成

遺物番号 器種 出土場所	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部 ・体部 ・底部(脚部) 形態と調整	胎土	焼成	<ul style="list-style-type: none"> ・外面色調 ・内面 ・断面 	備考
45 銅鉢 墳頂表土層	口径 33.0 cm (残存片からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	直径 2 cm 以下の石英、長石、チャートを含む。 微細な雲母多い。	ややあまい	<ul style="list-style-type: none"> ・淡茶褐色 ・黄褐色 ・黄褐色 	
46 銅鉢 墳頂表土層	口径 11.2 cm (残存片からの回転復元) ・ ・ ・底部未調整。 外面 6 条/cm の縦方向ハケメを左廻りに施した後ヨコナデ。 内面 ヨコナデ後 6 条/cm の条線。	直径 0.5 mm 以下の石英、長石、チャートを含む。 微細雲母多い。	ややあまい	<ul style="list-style-type: none"> ・黄灰色 ・明黄灰色 ・明黄灰色 	
47 土師質皿 墳頂表土層	口径 7.4 cm (残存片) ・外面 指頭による押圧。 内面 ナデ。 ・外面 指頭による押圧。 内面 ナデ。 ・へこんだ底部。 外面 未調整。 内面 ナデ。	直径 1 mm 以下の石英、長石、チャート、赤色粒を含む。 直径 0.5 mm 以下の雲母を大量含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> ・赤黄褐色 ・赤黄褐色 ・赤黄褐色 	
48 土師質皿 墳頂表土層	口径 7.7 cm (残存片から回転復元) ・外面 指頭による押圧。 内面 縦方向ナデ。 ・外面 指頭による押圧。 内面 縦方向ナデ。 ・へこんだ底部。 外面 未調整。 内面 一定方向ナデ。	直径 1 mm 以下の長石、石英を若干含む。 直径 0.5 mm 以下の雲母大量含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> ・淡黄赤褐色 ・淡黄赤褐色 ・淡黄赤褐色 	
49 鉄 刀子 墳頂崖横 地山直上層	残存長 3.9 cm。				基部分に木質残存。
50 須恵器 杯身 墳頂崖横 表土直下層	口径 10.6 cm (残存片から回転復元) ・外面 強いヨコナデ。 内面 強いヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヘラケズリ(右廻り) 内面 ヨコナデ。	直径 1 mm 以下の石英、長石、チャートを含かなり含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> ・暗灰色 ・暗灰色 ・暗灰色 	底部に卍のへう記号あり。

第4章 ま と め

今回調査を行なった巨勢山境谷10号墳は総数840基と言われる巨勢山古墳群の中で西北部に所在するもので、巨勢山山境から北に延びた一支尾根の鞍部からやや東に下った位置に占地する。

墳丘西半部を土砂採取のために破壊されていたので、自ずと制約の多い調査とはなったが、思いのほか多くの成果を得ることができたのは幸いであった。

墳丘は南北24m、東西約30mの若干東西方向に長い偏円形の円墳かと推定でき、巨勢山古墳群の中にあつては大形の部類に属するものであると言える。

墳丘端には全周を巡る、深さ0.3～1.0m、幅1.5～2.0m程度の周溝があり、墳丘端を画するものとなっている。墳丘北トレンチではこの部分から盛土が開始され、外側から内側へと積み上げられているが、墳丘東・南トレンチによれば、東・南方向については尾根側であるためか、盛土は墳頂部付近に限られており、地山を整形してそのまま墳丘としている。

北・東方向には盛土もしくは、地山整形による段築を意識したと思われる部分があり、築造当時は三段築成の円墳の感を与えるものであったと考えられる。

さて、今回の調査により検出できた埋葬施設は、墳丘中心から東南に大きく偏っており、その規模から見ても副次的な埋葬施設と考えている。

それは小形・無袖の横穴式石室で、まず構築にあたっては墓塚の掘削から始まるわけであるが、その底は全面にわたって確実に地山まで達しており、さらに石室基底石を据え付けるに際して、その形状にあわせて整形している。

これらの配慮は石材の安定を図ることを目的とするもので、副次的な埋葬施設であるからと言って、決して手を抜いたものではないことは注意しておかねばならない。このことはその開口方向前面に墓道が存在している事実によっても支持されると考えており、開口部における閉塞土・石の存在から勘案しても複数回の埋葬を意図して構築されたものと見做して大過ないであろう。

この横穴式石室の最大の特徴は、顕著な持ち送りを施していることであり、特に奥壁と側壁の接するコーナー部分においては、いわゆる三角持ち送り状を呈している。

これらの特徴は、九州地方に著しい初期横穴式石室の中でも肥後型横穴式石室に通有のものと考えられるが、当石室に限って言えば、その様な時代的な特性によつたものとは考え難く、むしろ使用石材、特に天井石の確保に苦心した結果と考えるべきであろう。

さて、当石室の構築年代については、墳頂部攪乱土内出土の須恵器杯身がTK209型式²⁾に該当し、無袖の横穴式石室であること、石室内壁面の調整が部位により精粗はあるものの、比較的丁寧であることも、この須恵器の示す年代観とは矛盾するものではないと考えており、7世紀前葉と見て大過ないであろう。

ところで、西の崖部分にあつたと考えている中心的な埋葬施設については、直接的な手掛りは何

ら得ることはできなかったのであるが、川西編年V期前半⁽³⁾を下限とする円筒埴輪が埴頂部の盛土内より出土することは、その築造年代を推定する根拠となるであろう。

御所市周辺の古墳を例にとると、橿原市新沢158号墳⁽⁴⁾、同175号墳⁽⁵⁾ではTK85型式須恵器に川西編年V期前半⁽³⁾の埴輪が共存し、高取町市尾墓山古墳⁽⁷⁾ではMT15型式を主体とする須恵器に対して川西編年V期後半⁽³⁾の埴輪が前半のそれと混在する。

従って大和西南部における川西編年V期前半⁽³⁾と後半⁽³⁾の変換はTK85型式期とMT15型式期の交を境として徐々に進行したものと考えられ、本墳の築造期に関してはTK85型式期⁽⁶⁾、すなわち6世紀初頭以降との一応の目処をつけることはできるであろう。

さて、今回の調査により得られた最大の成果は、実態がほとんど不明であった弥生時代の高地性集落、境谷遺跡⁽⁸⁾の資料を期せずして得られたことであろう。

弥生土器は寺沢薫氏による畿内第V様式細分案の様式2⁽⁹⁾に相当するものが大半を占めており、大和の高地性集落の動態に一致している。

なお、これらの弥生土器の多くは周溝内埋土から得られたものであり、埴頂部の表層を形成していた土の流出土である可能性が高い。

本墳は支尾根鞍部からやや東に下った地点に占地しており、埴丘盛土の採土にあたっては鞍部側から引き降すであろうと想定することが最も合理的な解釈かと思われ、従って境谷遺跡の中心的部分は残念ながら土砂採取により破壊されてしまった可能性が高いと推測している。

註1) 小田富士雄「2 九州」(『古墳時代 上』『日本の考古学』IV、1966年、河出書房新社)

(2) 田辺昭三「陶器古窯址群 I」(『平安学園研究論集』第10号、1966年)

(3) 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年)

(4) 藤井利章「IV 昭和38年度(1963年)の調査 158号墳」(『新沢千塚古墳群』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第39冊、1981年)

(5) 久野邦雄「V 昭和39年度(1964年)の調査 175号墳」(前出註4)文献)

(6) 土器型式の変遷を語るに際しては、古い型式的特徴を留める個体が半数近くを占めながらも、それ以外の個体に新しい型式的特徴が表出し出した段階をもって分期することが最も実状に近いものと考えられる。この様な観点からすれば、田辺編年(田辺1966)、中村編年(中村1978)共に分期の基準があいまいで同一の著書の中においても粗すぎる部分、細かすぎる部分が混在している。

以上の理由からTK47型式とMT15型式の中間にTK85(田代1978)型式を設定すべきであると考える。

田辺昭三「陶器古窯址群 I」(前出註2)文献)

中村浩三「陶器 III」(『大阪府文化財調査報告書』第30輯、1978年)

田代克己「陶器 III」(前掲書)

(7) 河上邦彦「市尾墓山古墳」(『高取町文化財調査報告』第5冊、1984年)

(8) 関川尚功「引ノ山古墳群」(1980年、五條市教育委員会)

(9) 寺沢薫「六条山遺跡」(『奈良県文化財調査報告書』第34集、1980年)

(10) 関川尚功「引ノ山古墳群」(前出註8)文献)

圖

版



1. 航空写真（西から）



2. 航空写真（西から）